

機知と特性記述

——フリードリヒ・シュレーゲルの批評概念について——

胡 屋 武 志

しばしば類比や比喩創出の能力と結び付けられる機知は学問的認識や文学的創出にとって一定の役割を持つものとみなされてきた。シュレーゲルの批評理論においても機知は積極的な役割を担っている。彼がとりわけ注目するのは、認識や言語使用において場を支配している規則を一気に超え出る機知の作用である。悟性や判断力が一定のコンテキストの内部で働き、主に既成の規則に則って諸事物を秩序化する働きを持つのに対し、機知はこうした秩序を突き破って新たなコンテキストを見出す能力である。シュレーゲルは機知の超出の働きを「束縛された精神の爆発」「想像力が発する稲妻」「無意識の世界からの稲妻」「脱走兵」「堅牢な様式に弾力性と電気を与えるもの」などの言葉で表現しながら、機知を構想力・ファンタジーの自由な思考力と同一視している。こうした機知の概念はロマン的文学の「アラベスク」的な原理、諸学問の融合・分離を繰り返す「論理的化学」として彼の文学・哲学理論の中で不可欠な役割を担っている。

シュレーゲルの思想においてこのような機知の能力は、多様化・断片化が進み個体同士の関係性が希薄化した近代において、新たに個体間の有機的な関係性を構成する能力として有効に機能することとなる。『難解ということについて』（1800）の中で彼は、金と同様の普遍妥当性を持った実在言語の不可能性を指摘しつつ、言語が作者の意図を超えて自立的に自己を展開していくことについて述べているが、ここに記述されているのは、言語が受容者によって様々なかたちで受容され、普遍妥当的・統一的な意味を持つことが困難な状況である。このような近代の脱中心的な状況において、言語は生を奪われた断片と化し、そこには有機的な意味と関係性が欠如している。しかし、シュレーゲルにとって言語の断片化は、必ずしもネガティブな事態であるばかりではない。なぜなら、断片的な言語こそが、その潜在的な多義性を逆手にとって神的な理念を象徴的・暗示的に表しうる可能性を持つからである。その場合、断片的な言語をいかに表現し受容するかが問題となるが、ここで鍵となる能力が機知である。機知は言語が持つ固定的な意味を超出し、言語に新たな意味を付与する超出の能力である。機知が潜在的・可能的な意味を言語に結びつけることによって世界の無限の多様性を記述する可能性が生じるのである。